

川島妙延

お母さんへ贈る

10の花束

表紙カバー絵・林ひさえ

お母さんへ贈る10の花束・目次

お母さんへのメッセージ 7

1 お母さんは大地……………15

芽生えめば 17 三つの大地 19 木のように花のように 21

2 かわいい子には旅を……………23

やる気と生命力 25 過保護の白菜 32 さよなら甘えっ子 37

3 五つの能力……………43

「五根」ごこんって何ですか 45 みんなで一緒に暮らしたい 50

4 心の四季……………55

養育は長い目で 57 親は立木たちきを見る 61

5 お母さんのアドバイス……………63

知恵と知識 65 いい子じゃなくていいよ 66

お母さんの夢はお父さんの夢と同じよ 69

6 内なる輝き……………73

子どもの心にネックレスを 75 ごぼうさんになりたい 77

おしゃれの小道具 81

7 安らぎのシンボル……………83

お母さんの懐ふとこはあったかいな 85

8 わが家の教授……………89

本当の善意 91 子どもの良さを知っていますか 94 白菊の花 100

9 非行への歯止め……………103

心に糧かてを 105 子どもを信じる親の愛 109 歪ゆがんだ勇氣 112

聞き上手、教え上手 118

10 社会生活への一歩……………121

小さな学べる社会 123 家族への思いやり 127

蓮華れんげのように……………135

気がついた人から変わりましたよ 136

与える幸せ 150 泥水どろみずに染まらず 157 自分自分は自分の心の母親 170

この本を手にされたあなたへ 188

お母さんへのメッセージ



私は幼稚園やPTA、婦人団体などでお話をさせていただいております。聴いてくださる方は女性、特にお母さん方が多いのですが、その方々の中には、妻や嫁や母などの経験がない尼僧にまうなのに、お母さん方の気持ちがわかるのだろうかと思われる方もいらっしゃることでしょう。

実際に、

「先生は子どもを持たれたことがないから、母親の気持ちはわかりませんよ」と涙を流しながら、子育ての難しさについて訴えられた方がありました。

私自身も最初は、お母さん方の悩みや苦しみを本当に理解し、それに応えこたえられるお話ができるだろうかという、不安がありました。

しかしお寺には、たくさんの方々が相談においてになります。家庭環境や職業も違い、さまざまな生き方をされている方々が、苦しみや哀かなしみを抱え、幸せになるための教えを求めて来られます。私は、その一人ひとりを母親のような気持ちでお迎えしています。何とかして、そんな方々のお力になれるように、お釈迦さまのような慈悲じひの心で接し



ていきたいと、いつも心掛けており、お母さん方とお話をするときも、これと同じような気持ちでやっていこうと考えるようになりました。

私は二十歳のとき、お師匠さまに出会いました。お師匠さまは今亡くなられていますが、その頃いろいろな問題で悩んでおりましたときに、私の心の中を、鏡に映し出すように見通され、一つひとつ解きほといていかれた不思議な力には、驚くばかりでした。そして、生かそうとする宇宙と、生きようとする万物の間に流れる生命の法則が、人間の内面にも貫かれていたという、お釈迦さまのお悟りをお師匠さまより初めてお聞きしたときの、新鮮な喜びを忘れることはできません。

私が二十三歳のとき、お師匠さまは、

「今、君が悩んでいる姿は、右に凡夫の子を、左に菩薩の子を抱いている相で観える。結婚して人の子の母となるか、出家して、多くの人々の心の母となり、世の母となるか、君自身が決めなさい」

とおっしゃいました。

私は一週間、人生の一大事と真剣に考え、自分の宿命として、多くの人々の心の母となる道を選びました。

それから二十余年。いろいろな相談をお受けする中で、お釈迦さまの教えのすばらしさを実感してまいりました。

今こそ、女性の生き方というものが大きく論じられ、女性が苦しみながらも、一所懸命に自分たちの生き方を見つけようとしている時代はないと思います。嫁姑の問題、夫婦の問題、子育ての問題といろいろありましようが、私は特に、女性の「母」としての役割は大きいものがあると思います。

みなさんは、初めて母親となったとき、どのように子どもを育てていけばよいのかという一つの目安を求めて、いろいろな本を読んだり、親から教えてもらったり、お姑さんに習ったりして、子育てをされてきたと思います。

しかし、本来の「母」というものの役割なり、使命なりについては、あまり明確には教えてもらえなかったのではないのでしょうか。

お釈迦さまの「母の十徳」という教えの中から、理想とされた母親像について、私はお師匠さまより深く学ばせていただきましたので、そのことを是非お話しさせていただきます。

「母の十徳」は、『大乘本生心地観経』というお経の中の、「報恩品」に書かれています。

最初、「……世間の母親が子どもを思う気持ちには比べられるものもなく、その恩は形にすることもできない。受胎してから十月の終わりまで、母親がふだんの生活でさまざまな苦悩を受けることは、言葉で表すことができないほどである……」と、母親への恩に報いることの大切さについて説かれ、次に、母性を持つ女性として本来備わっているものや、母親としての役割や使命について、10の項目にしてご教示されています。そ

して、母親への惜しみない讚美と理想の姿をお説きになっています。

お釈迦さまのお母さんはマーヤというお方で、お釈迦さまをお生みになって一週間目に、産後の肥立ちが悪くて亡くなられました。

お釈迦さまは、ご自分の命を引き換えにしてこの世に送り出してくださいました、お母さんへの感謝の気持ちなどのこもごもの思いを、「母の十徳」として伝え残されたのではないのでしょうか。

今の世の中では、「恩」ということは忘れられがちですけれども、私たち自身、こうして生命があり、生きているということは、目に見えないものの恩恵によって、現在の私たちがあると思いませんか。

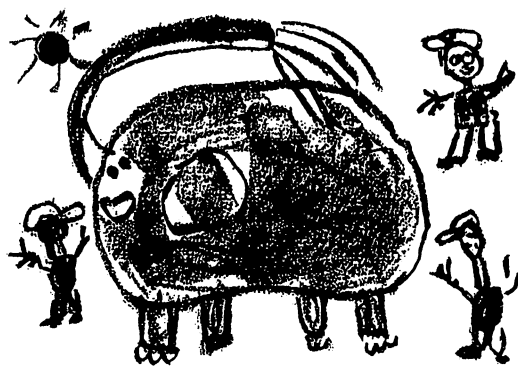
男性であろうと女性であろうと、すべての生命は母親の胎内から生まれてきました。

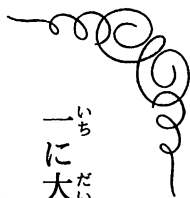
このことは、女性が女性自身の生き方を考える上でどのような意味を持っているのでしょうか。

お母さんへのメッセージ

私は「母の十徳」を、お釈迦さまからお母さん方へのメッセージとして受け止め、それを「10の花束」として、みなさんの胸に一つひとつお贈りしたいと思います。

1  
お母さんは大地





いち だいち なつ  
一に大地と名く

たいちゆう  
母の胎中を

しよえ な ゆえ  
所依と為すが故に



お母さん

たいじ  
胎児のいのちを

いづく  
慈しみながら

育てていけるように

豊かで

温かい心の

大地となりましょう

## 芽生え<sup>めば</sup>

「母の胎中<sup>たいちゆう</sup>を所依<sup>しよえ</sup>と為<sup>な</sup>すが故<sup>ゆえ</sup>に」とは、胎教<sup>たいきょう</sup>についての教えだと思ってください。受胎した子どもを種とするならば、お母さんには大地の役目がありますよ、ということです。

昔から、子どもが母親のお腹にいるときは、「夫婦げんかをしてはいけない」とか、「イライラしてはいけない」とか、「火事を見てはいけない」とか、いろいろなことが言われてきました。これは、一つの胎教といってよいでしょう。

現在は少産時代ということもあり、胎教も大きく論じられ、産婦人科が生き残っているための設備や環境の整備が競<sup>き</sup>わかれております。

しかし、産婦人科の設備環境は外の空気を通して受ける胎教であり、子どもを受胎す



るまでの二十年、三十年の間に形成してきた一人の女性の、内なる心（こころ）をみつめての胎教（たいきょう）とはいえませんか。

大地に落とされた一粒の種は、土の中の水分を吸収し、適度な温かさに包まれて、まず種の下に小さなひげのような根を出し、やがて種がパチッと割れて、新芽が出てきます。その大地が肥沃（ひよく）で、潤い（うるおい）のあるものであれば発芽しやすいものです。もし、からからに乾燥した土であれば、芽を出すことなく、種は死んでしまいかも知れません。水分があっても、寒いところでは発芽しません。あまり暑いところでは、その種は腐（く）ってしまいかも知れません。

種は水分と適当な温度によって、発芽するためのエネルギーが生まれ、芽生えを迎えることができるのです。

これと同じように、胎内の子どもも、母という大地が豊かで温かい心であってこそはじめて、すこやかに成長できるのではないのでしょうか。

## 三つの大地

それでは、お母さんの心が、受胎したときから十月十日とつきとうかの間、果して生命が生まれるための良い条件を備えた大地だったかどうか考えてみましょう。

ある方は新たな生命が与えられた喜びに満ち、ほのぼのと温かく、豊かな心だったかもしれません。そのときのお母さんの心の大地は恵まれており、胎教に良い環境であったといえるでしょう。

ある方は嫁姑のことで悩んでいたりと、ご主人と心が通じ合わなくて、心が寂しく、不安だったかもしれません。そのときのお母さんの心の大地は霜が降りているような、雪が積もっているような、冷たく寒い環境の胎教だったことでしょう。そこに落とされた生命は、やはり生きる上において、厳しいものがあつたと思います。

また、これを展開させて考えてみますと、結婚して生まれる一つの家庭を大地と考えることもできます。それぞれの家風といえますか、それぞれ違った家庭環境で育った者が同士が結婚して、新たな家庭をどのように築き上げていくのでしょうか。嫁いだ家庭にどのような溶け込み、馴染なじんでいくために、どれだけの時間が必要なのでしょうか。

一つの生命がこの世に生まれ出て、その家庭を大地として生きていくとき、子どもがすこやかに育っていけるような家庭環境であるかどうかということを考えることも、大切だと思います。

さらに、子どもが成長していくときに、地域環境、地域社会という大地は子どもに大きく影響していくことでしょうか。

なかなか子どもがうまく育たないとか、子育てに失敗したのではないかとか、なぜ思い通りにいかないのかなどと、いろいろと心に矛盾むじゅんや疑問を感じられたときは、まず、この「心」「家庭」「地域社会」という三つの大地について考えてみてください。

## 木のように花のように

これから子どもを授かりたいと思われる方は、子どもにどんな夢を描いておられるでしょうか。

お師匠さまは、

「もし、男の子だったら木のように育てなさい」と教えていただきました。

木は実をならします、実力という実をならします。実力は実の力と書くでしょう。

男の子は、これから結婚して、家庭を持って、一家の大黒柱となっていかなければならないのですから、しっかりと大地に根を下ろしていく大木のように育てましょう。

また、

「女の子なら花のように育てなさい」

と言われました。

部屋の中に花があるだけで心が潤うでしょう。

常に心に潤いがあって、香り高く、感じがよくて、人の心をなごませるような、そんな花のような女の子に育ててください。

そして、「母なる大地」と讃えられるような、生命を生み出す母性ほせいを持って生まれたことに、大きな喜びと感謝をもって、豊かで温かい心の「大地」となれるように努力していただきたいと思います。